



園内研を“仮説検証型”から“仮説更新型”へ

中国学園大学・中国短期大学副学長 住野好久

1. 「園内研究」の充実が求められている

幼児期をどう過ごしたかによってその後の経済的な成功に影響が出ることが明らかになり、幼児教育の重要性はますます注目され、幼児教育の質を高めることがより強く求められるようになっていきます。

幼児教育の質を上げるには、日常的な実践研究を園内で継続する必要があります。「こんな力を育てたい」という目標を明確にして実践し、その実践を省察することを通して実践の改善を進めることです。

2. 「仮説」を設定することで「研究」になる

実践研究というと、テーマに基づいて指導案を作成して公開保育をしたり、実践の記録を紹介・検討したりといった形式でよく行われていました。しかし、こうした実践研究では、なぜそのように指導案を作成したのか、なぜそのように実践したのかは明らかにされません。すばらしい実践はできたけど、どうして実践できたか説明できない、研究成果を再現・活用できないような実践研究だったわけです。

そこで私は実践研究に取り組む園には「このためにはこうしたらいいんじゃないか」という「仮説」を設定し、その仮説をふまえて指導案を作成して実践し、その実践を分析することで仮説を検証する実践研究の方法を提示してきました。こうすることで、どうして実践できたかを仮説の有効性を分析・検証することで説明できるようになり、その仮説を他の実践場面に応用したり、他の実践者も活用できるようになり、園全体として実践の質を改善していくことができるようになると考えたからです。

3. 「仮説」をどのように実践化するか

仮説検証型の実践研究において仮説は、目指す研究テーマに関連する自分たちの実践経験の中から、他園の実践経験や実践研究の成果から、そして研究

者の研究成果から導き出されます。多様な経験等から導かれるため、仮説はみんなが「そうだよね」と感じられる一般的で抽象的なものになりがちです。例えば、「協同して遊ぶ力を育むためには、みんなですれば楽しいという経験を積み重ねるようにしてはどうか」など。このような仮説はそのままでは実践できません。実践者は自分なりの仮説理解に基づき、そのときどきの子どもや活動・環境の状況をふまえて「仮説をどのように実践すればいいか」を考え判断して実践する必要があります。例えば、仮説にある「みんなですれば楽しいという経験」をつくるために、共通の目標を持ちながらも分担して好きなことができる遊び、例えば大型積み木や段ボールを使って大きな船を作って海賊ごっこをしてはどうか、などと自分なりに仮説から具体的な実践を構想します。仮説が抽象的であればあるほど、仮説から実践をイメージし、計画し、実践することは難しくなります。仮説をどのように実践化するとよいか明らかになる実践研究が必要なのです。

4. 「仮説」を検証して終わらずに更新し続ける

そこで、一般的・抽象的な仮説を「この仮説に基づいて実践したら確かに子どもたちに目指す力が育った」と分析・検証して終わる実践研究ではなく、仮説をどのように実践化したから効果的な実践ができたかを明らかにし、それを仮説に書き加え、仮説をより具体的で実践化しやすいものにします。例えば「特に5歳児では、みんなで分担し協力しないとできないような大きなものをつくって遊ぶことが有効ではないか」などと更新（バージョンアップ）していくのです。このように、仮説を具体化し、より蓋然性の高いものへと更新していくことが実践研究と実践の質を高めていくことになるのです。